

【学会レビュー】

日本マンガ学会第5回大会

木内英太

2005年6月18日と19日の2日間、京都精華大学黎明館において第5回日本マンガ学会大会が開催された。日本マンガ学会は、マンガという学問的にはマージナルなものを中心にして、例えば著作権の法律上の問題や光の屈折率の変化の表現のされ方などの、さまざまな専門分野の方々の多種多様な研究活動が紹介され、蛸壺的な狭い分野の専門家の集まりではなく常にジャンルを超えた斬新な視点が示されて毎回大変に刺激を受ける学会である。

1日目の研究発表から特に筆者の印象に残った発表を二つ紹介する。ひとつはイギリスのオックスフォードブルックス大学の日本学・映画学の専任講師である日本人女性が、英国の大学でのマンガをテーマにした授業の実践報告。“Media in Japan”という授業を担当していたが、学生の希望から“Understanding Manga”という授業をするようになった。学生の男女比は半々なのだがマンガの授業では受講者の7割近くが男性で、オタク的興味から受講する者が多かったという。

英国の若者の偏ったマンガの知識を体系化する目的は達成されて学生たちは手塚治虫などマンガの古典に興味を持つようになったが、テーマを選ばせるレポート課題で「古来の日本美術とマンガとの関連」を選ぶ者はなく、オタク文化を利用した現代アーティスト「村上隆」を選ぶ者は2名と少なかった。多くの学生が「セーラームーンとVampire Slayer」（ジェンダーがテーマ）といったテーマを選んだという報告には、マンガを使った授業をしている教員はどのような切り口で授業を展開すれば学生の興味を惹くのかを考えさせられる。なお日本古来の美術とマンガとを文化とし

て連続するものとする考え方には批判もある。

そして、(英語で書かれた) Primary Sources や References の少なさが授業のアカデミックな価値観を下げると同僚から指摘されたという報告には、歴史と伝統のある英国の高等教育機関で新しい試みをする難しさを感じさせた。

もう一つ。京都精華大学の教員と研究員による、マンガの音喩表現にみる聴覚情報の視覚的記録についての発表。音を別の感覚である視覚的な情報に置き換えてもらう実験で、現代人の視覚・聴覚がいかにマンガに影響されているかを探ったもの。被験者の大学生に野外で周りに聞こえる音を紙面上に表記してもらう。その際、聞こえた音がどのようなものか(迫力、金属性など)を表現するのにマンガ表現が使われることが多い。沈黙を「シーン」と文字で表現するのは日本のマンガのリテラシーがある者にしか理解できない表現であり、質疑応答でのアメリカ人日本マンガ翻訳家の「シーン」は英訳では何も表記しないことがほとんどであるとの発言など、興味深かった。

2日目の分科会のテーマは「マンガと戦争」であった。「戦時下におけるマンガ・漫画家」「戦後の戦記マンガブーム」「海外のマンガにおける戦争」「ジェンダーと戦争とマンガ」のテーマで発表、質疑応答がなされた。「9.11」の衝撃をニューヨーク在住の著名な漫画家スピーゲルマンが漫画化していて、その芸術的なマンガであればその表現手法の分析も面白いが、同じく「9.11」は最も大衆的なアメリカン・コミック「スパイダーマン」にも影響を与えているとの報告もあるのがさらに面白い。

日本については、マンガが教育に悪いといわれ

ていた時代に、8月には戦争に関わるマンガが雑誌に掲載されていて、ファンタジー系の傑作が多い少女漫画家大島弓子でさえも若い頃には意外なことに兵隊が血を吐いて倒れるリアルなマンガを描いていたとのコメントがあり、当時の編集者にはその意図があったという元雑誌編集者の貴重な証言があった。マンガが文化として認められてき

た現在ではマンガが子供に戦争を教える役割をやめているように見えるのは皮肉である。

なお、京都精華大学は日本初の「マンガ学部」が2006年にスタートするという個性のある大学で、図書館には約一万五千冊ものマンガがあり、まるでマンガ喫茶のようであった。